青森県「道の駅」検定　テキスト

県-番号	道の駅名	愛称	市町村	面する道路	内容
青森-1	しちのへ	七戸文化村	七戸町	国道4号	1993年4月第1回登録の道の駅・しちのへは、東北新幹線・七戸十和田駅から徒歩5分のところにある。地域の特産品を扱う物産館、生産者が野菜や加工品を出荷する産直施設、バラや季節の花を扱う花き展示館、24時間トイレや授乳室、道路・観光情報コーナー、鷹山宇一記念美術館が併設された「道の駅」。東北新幹線が開業した2010年、「道の駅」に併設する形で「しちのへ産直七彩館」がオープン、2015年には物産館がリニューアル、2018年には道路・観光情報館がリニューアルした。 2019年1月には重点「道の駅」に選定され、十和田奥入瀬観光の入口として、若い世代の交流・就業の場として地域の中心となっている。2021年6月には青森県で唯一の「防災道の駅」に選出された。 「道の駅」のある七戸町は、奥州街道の宿場町として整備され多くの旅人や物資が集まり、周辺経済の中心地であった。絵馬と競走馬を輩出している馬のまちでもあることから、駐車場わきには七戸産のダービー馬ヒカルメイジとフェアーウィンの像があり、馬を大切にしてきた土地ということがよくわかる。 また、ナガイモの発祥地とも言われている。江戸時代から生産が続いているナガイモはこの地域の特産品であり、上納品でもあった。 このほか、ニンニクなどが特産で「にんにくオイル」「黒にんにく」などがおすすめ。伝統工芸品「南部裂織（なんぶさきおり）」や「南部小絵馬」も人気である。また、レストランで提供している馬肉ラーメンも珍しいと評判である。
青森-2	はしかみ	階上ふるさと にぎわい広場	階上町	国道45号	青森県で一番早く朝日が昇る町の「道の駅」。一押しは、豊かな香りの「階上早生（わせ）手打ちそば」である。そば打ちと手づくり菓子の実演販売コーナーもある。そばは、階上在来系統から選抜された「階上早生（はしかみわせ）」という品種を使用しており、直売所の裏の畑を始め自分たちの畑で育てたソバを実演所で手打ちしている。風味豊かなその味は、「一度食べるとやめられない」と人気で、10月には階上町で新そばまつりが開催されている。そのほかにも、小麦粉に甘味噌を入れて焼いた昔懐かしい「ほど焼き」、麺にワカメなどを練り込んでさっぱりとした塩味の「海藻ラーメン」、階上町名産のウニとアワビを贅沢に使った「いちご煮」も人気である。 緑豊かな標高740mの階上岳と太平洋を望む階上町は、青森県の南部最東端に位置し、北・西は八戸市、南は岩手県洋野町、東は太平洋に面する。八戸市のベッドタウンとして八戸都市圏の一部となっており、八戸工業大学に通う学生の多くが居住している、人口約1万3千人の町である。また、多くの縄文遺跡が点在し、1290年以上の歴史と文化を誇っている町でもある。
青森-3	虹の湖	虹の湖公園	黒石市	国道102号	1988年に完成した、青森県最大級の多目的ダム・浅瀬石川ダムのダム湖である「虹の湖」横の公園にできた、1993年第1回登録の「道の駅」。コンビネーション遊具などで遊べ、パターゴルフ場もあり、家族連れで一日中楽しめる。11月上旬 ～ 翌年4月下旬は冬季閉鎖となっている。また、日本国内有数の温泉がある青森県でも人気の「ランプの宿 青荷温泉」利用者の駐車場と温泉を結ぶシャトルバスの発着場でも利用されている。 黒石市の事業者と協業し、地場産品を活かした南八甲田の水で育った黒石産野菜のクリーミーポタージュは、「道の駅」のある黒石市内だけでなく、青森県内でも販売されている。また、B級グルメの「黒石つゆ焼きそば」が堪能できる。「黒石つゆ焼きそば」は、モチモチした食感の太平麺をウスターソースで炒めた「黒石やきそば」に、たっぷりのつゆをかけ、揚げ玉やネギをトッピングしたもの。昭和30年代後半、旧・中郷中学校前にあったお店「美満寿（みます）」が、学校帰りの子供たちに冷めた焼きそばの上に温かいそばつゆをかけて食べさせたのがはじまりとされている。近年は、ご当地グルメとして人気を呼び、ラーメンスープをかけたり天ぷらや卵をトッピングするなど、様々なタイプが登場。黒石市にある焼きそばの店舗は約70軒あり、昔から地域にやきそばが根ざしていることが伺える。2008年には「黒石やきそば」による経済波及効果は約10億円と算出された。
青森-4	わきのさわ	リフレッシュ センター 鱈の里	むつ市	国道338号	下北半島の西南端に位置する道の駅・わきのさわは、半島北端にある大間町から南下し、仏ヶ浦などを通る、むつ市脇野沢村地区にある「道の駅」である。山裾に造成された小高い台地に建っていおり、内部は総ヒバ造りとなっている。ヒバはヒノキの仲間で、殺菌効果のある芳香を放ち、腐りにくい木材だ。しかし生長が遅く、木材として利用できるようになるには200年以上かかり、「道の駅」はこのような天然木を間伐してつくった建物である。「道の駅」では青森ヒバの細木を使った箸などの木材工芸品、ヒバエキスを利用した商品なども取り扱っている。12月上旬～3月は冬季閉鎖。 脇野沢地区は旧脇野沢村で、江戸時代からのマダラ産地である。真冬に獲れるマダラは「淡白な味わいの身、とろける濃厚な白子」として青森県内でも冬の風物詩となっている。干しタラやカタクチイワシの焼き干しは、脇野沢ならではのお土産品となっている。カタクチイワシの焼き干しは、青森県の津軽地区や下北地区では郷土料理やラーメン、煮物の「だし」として欠かせないものとなっている。 脇野沢を含む下北半島に生息する野生のサルは、ヒト以外の霊長類では、世界で最も北に生息しているため「北限のサル」と呼ばれ多数のニホンザルが生息している。「道の駅」に隣接している「野猿公苑」では、そのサルを間近に見ることができる。

県-番号	道の駅名	愛称	市町村	面する道路	内容
青森-5	かわうち湖	野平高原 交流センター	むつ市	県道253号	2005年3月に旧・大畑町、脇野沢村とともにむつ市と合併した旧・川内町は、青森県の北、陸奥湾に面した下北半島の西南部に位置する。一帯は、ダム湖百選に選ばれた「かわうち湖」を中心に「レイクサイドパーク」として整備され、むつ市の観光名所となっている。 1995年第5回登録で道の駅・かわうち湖に指定され、本州最北端の「道の駅」として、四季折々の自然美の景観は最高のロケーションで、春夏秋と美しい景観を楽しめる。 特産品の購入や食事ができる総ヒバ造りの施設「野平高原交流センター・レイクハウス」は、北欧調のログハウスタイプの建物で、下北地方の観光地として知られる「恐山」や「仏ヶ浦」の中継地点になっていることから、観光客の立ち寄り場となっている。 青森ヒバの加工品や、アカマツで焼く「宇賀焼」の陶器は素朴な風合いが評判。また、名物の高原ざるそばや黒豆ソフトクリームなどが味わえる。また、むつ市川内地区の郷土料理で名物の「けいらん」も提供されている。「けいらん」とは、秋仕舞いのごちそうの中でも人気のある料理で、椀の蓋を開けると白い卵形の団子が二つ浮かんでいる。あんこの甘さと醤油味のだし汁の旨味が調和した上品で優雅な味わいのすまし汁で、団子が鶏の卵のように見えることから「けいらん」の名がついた。元は京都の料理で上方文化の伝承とともに旧南部藩に伝来したといわれ、現在では青森県下北地方、岩手県、秋田県の一部に伝わり、地域によってつくり方や味が異なる。慶事には紅白に色付けしたもの、弔事にはうずらの卵ほどの小振りで青や緑に色付けしたものが振る舞われる。
青森-6	しんごう	間木ノ平 グリーンパーク	新郷村	国道454号	標高370mの高原に広がる、広大な「間木ノ平グリーンパーク」内に道の駅・しんごうがある。キャンプ場、スポーツ施設、ふれあいの川といったレジャースポットがある自然滞在型観光レクリエーション施設で、ヒツジ、ヤギ、ポニーなどの動物とふれあえる「ふれあい牧場」、魚のつかみどりができる「ふれあいの川」などがある。 地場産品直売センターでは、産直野菜や果物、牛乳や飲むヨーグルトなどの乳製品、肉加工品、スイーツを販売。春は天然山菜、夏はニンニク、秋はキノコと新郷村の季節の旬の特産品も並び、新鮮なものが手に入る。そのほか、新郷村のキリスト伝説から誕生したという、にんにくアイスや生キャラ煎餅など気になるオリジナル商品が豊富に揃う。 人口約2,200人の新郷村で語り継がれる「キリスト渡来伝説」は、1935年、茨城県磯原町(現北茨城市)にある、皇祖皇太神宮の竹内家に伝わる竹内古文書から出てきた。その後竹内氏が訪れ、キリストの墓を発見、次いで弟であるイスキリの墓も発見されたことから、神秘の村として人々の注目をあびるようになった。これにより、不思議な伝承の数々があったとされる。地名の戸来(へらい)はヘブライからくるという説。父親をアヤまたはダダ、母親をアパまたはガガということ。子供を初めて野外に出すとき額に墨で十字を書くこと。足がしびれたとき額に十字を書くこと。ダビデの星を代々家紋とする家があること。そして、「ナニヤドヤラー、ナニヤドナサレノ」という意味不明の節回しの祭唄が伝えられていることなど。毎年6月上旬には恒例の「キリスト祭」が行われ、奉納舞「ナニャドヤラ」が披露されている。
青森-7	ひろさき	サンフェスタ いしかわ	弘前市	国道7号	東北自動車道・大鰐弘前ICを降りてすぐの道の駅・ひろさきは、1995年第8回登録の「道の駅」で、弘前市の特産であるリンゴや新鮮な野菜、お土産品、手作りパンなどがある。中でも人気なものは「津軽ジェラート」。青森りんごジェラート、嶽きみジェラートは地元産の素材を使った大人気商品だ。 弘前市はリンゴ生産量日本一の市町村で、2位長野市の約4.5倍の生産量をほこる。8月上旬の夏緑からはじまり、きおう、未希ライフ、つがる、トキ、ひろさきふじ、紅玉、世界一、ジョナゴールド、アルプス乙女、陸奥、王林、栄黄雅、11月のふじと収穫が続く。 もう一つの特産「嶽(だけ)きみ」は、津軽富士・岩木山麓の嶽(だけ)地区で栽培・収穫された甘みの強いトウモロコシ(津軽弁で”きみ”という)。2007年には地域団体商標に登録され、ブランドとうもろこしとして全国に知られるようになった。標高400～500mほどの場所に位置する嶽地区の昼夜の寒暖差によって、糖度が約18度と高く、プチプチした食感が特徴。シーズンになると嶽地区・百沢地区周辺では嶽きみの直売所が建ち並び、地元だけでなく、全国各地から多くの人が訪れる。 「道の駅」から車で30分の弘前公園は、桜の名所として全国的にも有名である。園内には50種以上約2,600本の桜の木がある。リンゴの暫定技術を応用した「弘前方式」によって”桜守”が管理している。リンゴの木のように横に枝を伸ばしていく技術を桜にも応用しているため、弘前公園の桜は低い位置でボリュームある花が咲く。
青森-8	奥入瀬	奥入瀬 ろまんパーク	十和田市	国道102号	道の駅・奥入瀬は、十和田湖・奥入瀬渓流への玄関口として1995年に誕生した。 1997年、奥入瀬ビールの製造が開始、2022年春、青森りんごのスイーツ＆カフェ、奥入瀬の源流水で造られる奥入瀬ビール、ブルワリー併設石窯レストランなど、十和田をはじめとした青森の食が集う「クラフトフードマーケット」として、新しく生まれ変わった。 奥入瀬ブルワリーは、八甲田連峰の世界有数のブナの森から、長い年月をかけて湧き出す伏流水である「奥入瀬の源流水」を使い、ヨーロッパスタイルのビールを製造している。ヘッドブルワーはチェコで技術を学び、20年以上にわたって愛される4つの定番ビール(ピルスナー、ダークラガー、アンバーラガー、ヴァイツェン)は、ブルワリー立ち上げ当時から続く奥入瀬ビールクラシックとして人気商品となっている。 ブルワリー直営レストランでは、津軽金山焼(青森県五所川原市)の職人による手作り釜で作った出来たてのピザや肉料理を食べることができる。奥入瀬ビールとの相性は抜群で、テイクアウトも充実、夏は屋外でのBBQメニューも楽しめる。 手作りハウス味楽工房では、みんなが安心して食べられる美味しいものを手作りしている。地元で生産・飼育される生乳を使用し、のむヨーグルト、ソフトクリームを作っている。 「道の駅」の名前の由来にもなっている奥入瀬渓流は、十和田湖・子ノ口から焼山までの約14kmの流れをいう。十和田湖と奥入瀬渓流は、十和田八幡平国立公園を代表する景勝地の一つで、特別名勝、天然記念物として国の指定を受け保護されており、滝や清流、岩など、たくさんの見所がある。渓流沿いには車道と遊歩道が整備されて新緑や紅葉のシーズン時には特に、自然を満喫する人々の癒しの場となっている。

県-番号	道の駅名	愛称	市町村	面する道路	内容
青森-9	さんのへ	ふれあいハウス	三戸町	国道4号	三戸城や武家屋敷をイメージした日本風の建物の、1996年第10回登録の「道の駅」。三戸をはじめ周辺市町村の特産の食べ物、おみやげ品が揃っている。特に三戸せんべい（南部せんべい）の品揃えは豊富で、さまざまな味を楽しむことができる。三戸町出身の漫画家故・馬場のぼるさんの代表作『11ぴきのねこ』グッズの品揃えが充実している。 近年、全国的にも人気のある絵本『11ぴきのねこ』を活用したまちづくりが行われ、町のいたるところ、看板、案内表示、タクシーなどにねこたちがいる。さらに、2020年3月には、全11体の『11ぴきのねこ』の石像が町内に設置された。グッズはぬいぐるみ、文具、タオルなどあり、子どもから大人まで愛される超人気商品となっている。 三戸町はJR八戸駅から車で約35分、青森県三戸郡の南端、岩手県との境に位置する町である。 古くから三戸郡の中核機能を有する町として栄えてきた。戦国時代には三戸城もあり、重要な拠点となっていた。 冷害や飢饉に見舞われることの多かった南部地方では、コメ以外の雑穀で食文化を発展させてきた。「じゅね」とはエゴマのことで、「じゅね餅」はエゴマの実を炒って丁寧にすり、味噌と砂糖と混ぜ合わせてたれをつくり、薄く切った餅に絡ませてつくる郷土料理である。また、小麦粉やそば粉でつくった串餅にたれを塗ってこんがりと焼いた「じゅね餅」も見かける。このほかにもじゅねを使った三戸せんべいやみそ、ドレッシング、オイルなども商品化されている。
青森-10	なみおか	アップルヒル	青森市	国道7号	道の駅・なみおかは、青森～弘前間のほぼ中間地点、国道7号線沿いにある、1996年第10回登録のリンゴが自慢の「道の駅」。青森空港や浪岡ICからも近く、休憩スポットとして便利である。 施設内には、浪岡地区で採れたリンゴをふんだんに使った手作りアップルパイなどのスイーツが人気。他にも地域特産品などを数多く揃えたおみやげコーナー、青森県産米と地場野菜を使った料理が好評なレストランなど、青森ならではのお店がたくさんあるほか、風光明媚な丘には大きな花壇や遊具もある。 なかでも、「観光りんご園」は、9～11月上旬の収穫の時期にはリンゴもぎ取り体験ができる。それ以外にも、りんご花まつり、雪見りんごなど、年間を通して楽しめるさまざまなイベントが開催されている。 春には、冬の間雪室で貯蔵した「雪むろりんご」を販売。瑞々しく甘味も増したリンゴを求めて毎年多くのお客様で賑わっている。 「道の駅」から車で10分ほどの所に、1460年代に浪岡北畠氏によってつくられたと言われる「浪岡城跡」がある。1500年代前半の最盛期には、京都と盛んに交流し、寺社なども建立していたが、1562年におきた親族間での争い（川原御所の乱）により勢力が衰え、1578年に大浦（津軽）為信に攻められ落城、以後、約400年、城跡は畑や水田として使われてきたが、1940年、青森県で初めて国史跡指定を受けた。発掘調査により当時使っていたものが大量に発見され、浪岡城が戦国城館としてだけではなく、住むための、いわゆる居館であることがわかってきている。
青森-11	十三湖高原	トーサム グリーンパーク	五所川原市	国道339号	津軽国定公園の一画にある、1997年第11回登録の「道の駅」。十三湖畔の高原牧草地内にあり、360度のパノラマに秀峰岩木山、八甲田連峰、中山山脈、そして日本海を望む風光明媚で、憩いのスポットである。敷地内には、シンボル「展望台トーサムタワー」、「レインボー滑り台」などがあり、子どもから大人まで楽しめる施設が充実している。 館内では、十三湖産のヤマトシジミを直売するほか、その加工品も販売、併設する産直コーナーでは新鮮な地元野菜、お食事処「レストランわらび」では大人気「しじみラーメン」、何度食べても飽きない「ソフトクリーム」を堪能することができる。 また、1987年、仙台市で開かれた東北・北海道ブロックの品評会で東日本チャンピオンに輝き、高級ブランドとして知れ渡ることになった「市浦牛」もある。数が非常に少なく、「幻の市浦牛」と呼ばれているが、市浦地区（旧市浦村）で強風吹き荒れる過酷な冬を経験する市浦牛は上質な脂を蓄えており、レストラン内で提供している。 津軽半島の中ほど、岩木川が日本海に注ぐ地に十三湖と旧市浦地区があり、十三湖が面積の1/5を占める市浦地区は、古くから美味しいシジミの名産地として知られている。シジミは江戸時代から、近くの川や用水路で採れる貝として親しまれ、全国の川や湖で生息している。しかし、十三湖は川の水と海の水が混ざり合う汽水湖で、シジミの生育に最適で、おいしいシジミが育つ。漁獲量が1,900t前後と比較的少なめ（シジミで有名な宍道湖では約9,000t）で、青森や東北以外ではあまり知られていないが、身が大きく旨みが強く、一度食べたらその旨みが忘れられないと評判である。
青森-12	いまべつ	半島ぷらざ アスクル	今別町	県道14号	2016年3月26日開通の北海道新幹線「奥津軽いまべつ駅」とJR津軽線「津軽二股駅」に隣接した「道の駅」。青函トンネルをイメージした外観が印象的で、観光情報コーナーがあるほか、レンタサイクルなど二次交通も充実しており、奥津軽観光の拠点に最適である。 物販コーナーでは、地元産の新鮮な野菜や海産物の加工品、お土産などを販売し、時期によっては地元で水揚げされた新鮮な魚が並ぶ日もある。レストランでは、幻の黒毛和牛とも呼ばれる「いまべつ牛」のステーキや、牛肉が入ったラーメンなど珍しいメニューも味わうことができ、特産品のモズクを粉末にして練り込んだ風味豊かな「もずくうどん」も人気である。 今別町は青森県東津軽郡の北部に位置する、人口約2,000人の町で、津軽半島北端にあり、三厩湾に面している。地名の由来は、伝承によると、源義経一行が北上する途中、当地付近の川に行き、大雨の後の増水で浅瀬が淵になったと驚き、この地を「今淵」と命名、のちに訛って「今別」になったとされている。 また、青森県無形文化財に指定された「荒馬」がある。荒馬とは、江戸時代発祥の神事と伝わる、勇壮な踊りで、田植えが終わり田の神が天に昇る時、農民が神に加護と感謝を表すための「神送り」「ササブリ」の行事と言われており、町内各地で継承されている。 毎年8月上旬に行われ、地区ごとに跳ね方に違いがあり、それぞれの地区名を取り「今別荒馬」「大川平荒馬」「二股荒馬」に大別される。馬役の男性と手綱取りの女性が男女ペアとなり荒々しく跳ね回り、男女ペアで行われる伝統芸能は全国的にも珍しく、息が合わないと綺麗に跳ることができないため、お互いを思いやる阿吽の呼吸が必要となる。ゆえに、荒馬が縁で結婚したカップルも多く、縁結びの側面を持ったお祭りでもある。

県-番号	道の駅名	愛称	市町村	面する道路	内容
青森-13	なんごう	カッコーの森 エコーランド	八戸市	県道42号	道の駅・なんごうは、宿泊施設と、八戸市南郷地域の文化・味覚・風土を体験できるスペースを融合した、八戸市南郷地域の拠点施設である。 「JAZZの館」は、ここでしか聞けない「音」を追求したこだわりの音響設備で、ジャズを存分に楽しむことができる施設で、真夏の祭典「南郷サマージャズフェスティバル」の開催地としても有名。不定期にJAZZライブも開催している。 観光農園では、1月～5月のイチゴ、6月～7月のサクランボ、7月～8月のブルーベリー、10月～11月のリンゴの収穫体験ができる。 施設内のレストランで提供するそばは、栽培から製粉まで全て南郷にこだわって提供、製粉は八戸市南郷そば振興センターにてじっくりと石臼で挽き、製麺は毎朝職人による手打ち十割そばで、ソバ本来の味と香りが強く、しっかりとしたコシが特徴である。 付近には陸上競技場やサッカー場、様々なスポーツに対応する全天候型のドーム型屋内運動場、ジャクジーやウォータースライダーを備えた屋内温水プールもあるため、子どもから大人まで楽しめる「道の駅」となっている。 八戸市の南側、約3分の1が南郷地域となっている。夏はやませの影響を受け冷涼で、冬は晴天が多く乾燥し、北東北でありながら、比較的降雪量が少ないのが特徴。ソバやブルーベリーが南郷の特産品として生産され、観光農業にも取り組んでいる。「道の駅」から車で10分ほどの廃校となった小中学校を活用した体験交流施設では、そば打ち、炭焼き、豆腐づくり、味噌づくりなど田舎暮らしの体験メニューが充実。8月下旬に咲き誇る、200万本ものヒマワリ畑は近年人気を博している。
青森-14	もりた	アーストップ	つがる市	国道101号	滞在型リゾート施設『つがる地球村』の先端に位置することからアーストップとネーミングされた道の駅・もりたは、1998年第14回登録の「道の駅」である。各販売コーナーには、つがる市ならではの物産や新鮮な農産物、津軽各地の郷土品や手作り工芸品などが豊富にある。ボリュームたっぷりで、種類が豊富のメニューの「レストラン野のこ」、リニューアルにより広くなった産直「おらほのめへ」は、野菜や果物、アップルパイやクッキーなど、地元のおかみさんの手作り品が並び人気である。敷地内には地域で有名なTATSUYAによるパン販売の施設もあり、ソフトクリームやシェークも楽しめる。 つがる市は人口約21,000人の市で、2005年に木造町、森田村、柏村、稲垣村、車力村の1町4村が新設合併し、青森県内では9番目の市として設置され、現在に至る。 有名な特産品のひとつはメロンで、つがる市独自の基準に基づいて認定している「つがるブランドメロン」はセンサー付き選果機により糖度などを早く正確に測定することで品質の安定化が図られている。また、7月上旬から9月中旬頃までは青森県オリジナルの「つがりあんメロン」(アムさん・ホームビレンス・アーバンデリシャス・スウィートルビー・ハニーゴールデンの5品種の総称)のリレー出荷が始まり、「道の駅」の店頭でも販売され、大人気となっている。 遺跡の発掘も多く、縄文前期～中期の「田小屋野貝塚」、縄文後期の「亀ヶ岡石器時代遺跡」からは数々の品が出土している。中でも「亀ヶ岡石器時代遺跡」から1887年に出土した「遮光器土偶」は国の重要文化財に指定された。JR五能線木造駅の駅舎は、遮光器土偶の形をしており、土偶本体は、目を点滅させて電車の発着をお知らせする「いらっしゃいビーム」で乗客をお出迎え、お見送りをしている。駅舎は、特徴ある駅として”東北の駅百選”にも選定されている。
青森-15	浅虫温泉	ゆ～さ浅虫	青森市	国道4号	道の駅・浅虫温泉は、青森市内から約30分、青い森鉄道浅虫温泉駅からすぐ、5階建ての1999年第15回登録の「道の駅」。道路情報や観光案内はもちろん、休憩コーナーや展示スペース、多目的に使用できる会議室も完備。3階にはキッズコーナーと授乳室が、最上階の5階には、この「道の駅」の目玉でもある展望浴場があり、陸奥湾や正面に浮かぶ湯の島を眺めながら入浴できる。 1階の物販コーナーには地元の特産、土産品が充実。中でも浅虫銘菓の久慈良餅や板かりんとうが人気。隣接する「ゆ～さ市場」では、野菜や果物をはじめ、生花類など販売している。 「道の駅」の人気商品の一つである「久慈良餅」は、当時日露戦争による傷痍軍人が数多く温泉療養に来ていたが、お菓子やお土産がなかった。そこで初代が、郷里の津軽鯵ヶ沢にて習い覚えていた鯨餅の製造を思い立ち、「いく久しく慈しまれる良い餅であるように」との願いを込めて、名前も「久慈良餅(くじらもち)」となった。 浅虫温泉は1000年以上の歴史がある温泉郷で、「東北の熱海」、「青森の奥座敷」などと呼ばれ、浅虫夏泊県立自然公園の一角を成している。その由来は、平安時代に慈覚大師(円仁)により発見された温泉で、布を織る麻を蒸すためだけに使われていたが、1190年にこの地を訪れた円光大師(法然)が、傷ついた鹿が湯浴みするのを見て村人に入浴をすすめ、それ以来人々に利用されるようになった。温泉名も麻を蒸すことに由来し、「麻蒸」が転じて「浅虫」になったと言われている。
青森-16	いかりがせき	津軽「関の庄」	平川市	国道7号	周りを山々に囲まれ、関所といで湯の里として知られる青森県平川市碇ヶ関。秋田県との県境に接した国道7号線沿いにある道の駅・いかりがせきは、江戸時代の庄屋屋敷を想わせる外観は随所に歴史を感じることができる。 敷地内にはかけ流しの温泉や足湯、お食事処、特産品直売所をはじめ、御関所資料館など、テーマパークをコンセプトにした「道の駅」となっている。2023年3月にリニューアル、レストラン「彩里」や、碇ヶ関の特産品自然薯入りのたこ焼きが味わえる「竹っ子庵」など食事のできる文化観光館、地元農家持参の農産物や特産品が所狭しと並ぶ特産品販売所、トイレや情報コーナーも一新した。 温泉「御仮屋御殿」は、大浴場や貸切の露天風呂など、低張性弱アルカリ性温泉のかけ流しが楽しめる。出窓状に張り出した形状は露天風呂を思わせ、どの風呂も青森ヒバを贅沢に使い、木の温かさを感じながら、心地よい香りでリラックスできる。 平川市碇ヶ関地区は、津軽藩政時代に関所が設置されていたこと、温泉に恵まれていたため参勤交代のときの藩主の御仮屋(宿泊地)になっていたことなどがあり、関所のある温泉宿場町として栄えた。1950年代には、県下ではじめて碇ヶ関の温泉統合を行い、湯ノ沢温泉・相乗温泉・古遠部温泉の開発によって「碇ヶ関温泉郷」とし、関所を復元、観光振興を図った。 地域の中央を国道7号が縦断し、JR奥羽本線「碇ヶ関駅」や東北自動車道「碇ヶ関インターチェンジ」を有していることから、藩政時代から現在まで、交通の要衝として津軽の玄関口となっている。

県-番号	道の駅名	愛称	市町村	面する道路	内容
青森-17	いなかだて	弥生の里	田舎館村	国道102号	敷地は7.5haで産直センター、レストラン、遊具施設等があり、ゆったりくつろぎ遊べる広場になっている。4月～11月はフリーマーケットが開催され、6月～9月には、「道の駅」から「第2田んぼアート」が、2月ごろには冬の田んぼアート（スノーアート）も楽しめる。 産地直売センターでは、地元生産者から届く新鮮な野菜や果物をはじめ、特産物やお土産、手作りみそ、豆腐、おにぎりなどの惣菜類と品ぞろえは豊富。また、センター内には、コミュニティーFM放送局「FMジャイゴウェーブ」のスタジオが併設。敷地内にある「レストランジャイゴ」では、「弥生ラーメン」「土器カレー」など田舎館を楽しめるご当地メニューも。近くには田舎館村埋蔵文化財センター・田舎館村博物館、場外馬券売り場（ウインズ津軽）もあり、子どもから大人まで楽しめる。 田舎館村は、津軽平野の南部にある一次産業を中心とした農業が盛んな村で、東に八甲田連峰、西に岩木山、村の中央を浅瀬石川、弘前市との境を南北に平川があり、豊かな水と肥よくな土壌を生成、その恵みは、コメ、リンゴやイチゴなど、多くの特産品を生み出している。 縄文時代や弥生時代の遺跡が数多く確認されており、なかでも東北地方で初めて発見された、弥生時代中期の水田跡「垂柳遺跡（たれやなぎいせき）」は、1981年に弥生時代中期末（約2,100年前）の小さな水田跡が良好な状態で発見され、全国的に有名になった。東北北部の弥生文化には稲作農耕はなかったという常識を覆した遺跡で、1枚の水田面積が約 8㎡と小さいのが特徴。2000年4月に国の史跡として指定された。道の駅・いなかだての整備にあたり、弥生時代の昔から現在に至るまで米作りが脈々と続いてきた歴史ある村であることから、「弥生の里」と命名されている。
青森-18	よこはま	菜の花プラザ	横浜町	国道279号	道の駅・よこはまは、ホタテとナマコをモチーフにデザインされた特徴ある建物で、青森県菜の花の町、横浜町にあり、昔から、風がとにかく強い土地にある。県内2位の水揚げであるホタテは荒波に耐えて甘く、ジャガイモは県内1位の収穫量、たった3日しか漁をしない「横浜なまこ」は、県内でも人気の高い珍味である。また、菜の花の栽培面積が本州一で、車で10分ほどの自然体験ランド自然苑近くでは、満開の時期には菜の花フェスティバルが開催され、巨大菜の花迷路などが楽しめる。 物産館「菜の花プラザ」では、穫れたての野菜や特産品などが豊富にあり、食品加工室では、JA十和田おいらせ女性部横浜町支部加工部会が作る菜の花ドーナツは、一番人気。菜花の若芽（茎、芽、蕾）をミキサーで練りこみ、国産小麦、横浜町特産なたね一番搾り油を使用している。レストラン「鮮菜」では、地元横浜町のホタテなどの食材を豊富に使った料理を提供、高い天井と、大きな窓の開放感のある店内で、横浜町の味をゆっくりと楽しめる。 2015年度に県内で初めて重点「道の駅」に選ばれた。2012年2月の豪雪で、野辺地町からむつ市の約39㎞にわたり19時間半も通行止め、約400台の車両が立ち往生した災害時に、多数の車の避難場所となった。2017度から総事業費14億7,100万円をかけて「道の駅」と周辺整備を進めた。すぐそばには建設中の下北半島縦貫道路のインターチェンジが設けられ、縦貫道の避難施設としても活用することができ、縦貫道の除雪拠点としても重視されている。2021年には、「道の駅」の向かいに防災物資を備蓄する倉庫、9月には多機能トイレや授乳スペースを備えた広大な駐車場もある休憩施設がオープン、11月には休憩施設の隣でヘリポートを併設する防災除雪ステーションが供用を始めた。町の避難所にも指定され、周辺も含めて整備が進めば、災害時には自衛隊の前線基地としての役割も期待されている。
青森-19	みんまや	竜飛岬	外ヶ浜町	国道339号	道の駅・みんまやは、津軽半島最北端の風光明媚な観光地・龍飛岬に近い「道の駅」で、「青函トンネル記念館」が併設されており、建設当時の雰囲気が体験できる。青函トンネルとは、津軽海峡を横断し本州と北海道を結ぶ海底240m、総延長53.85kmの長大海底鉄道トンネルで、1954年の台風による青函連絡船洞爺丸沈没という世界的にも大きな海難事故を契機として建設が促進された。海底部の掘削では4度の大出水事故による水没の危機を初めとした難工事の連続だったが、1983年に先進導坑、1985年には本坑が貫通し、1988年に津軽海峡線として開業した。記念館では、海面下140mの世界を体験できる「体験坑道」へは 「青函トンネル竜飛斜坑線 もぐら号」に乗り込んで 斜度14度の斜坑を7分で案内、体験ツアーの所要時間は約40分で、世界へ誇る大事業が体感できる。今も利用されている地下坑道の一角に特設展示エリアを設け、実際に掘削に使われた機械や器機などを展示、 当時の現場を再現展示している。 館内には新鮮な海の幸が味わえる海峡味処「紫陽花」、売店コーナーでは特産品やオリジナルグッズなどを販売している。毎年11月上旬から翌年4月下旬までの間は冬季閉鎖される区間にあるため、全館休館となる。 近隣には、竜飛埼灯台や階段国道などの名所もある。特に「階段国道339号」は、「道の駅」から車で数分のところにあり、日本で唯一、国道でありながら車もバイクも通れず、歩行者しか通れない不思議な国道となっている。階段の前には、青い三角標識「国道339号」と「階段国道」という小さな表示がともに立っている。岬下の龍飛漁港から龍飛埼灯台まで362段の階段で、総延長388.2m、標高差約70m。途中にはベンチが置かれており、休憩を入れながら歩くことができる。

県-番号	道の駅名	愛称	市町村	面する道路	内容
青森-20	こどまり	ポントマリ	中泊町	国道339号	日本海に面した国道339号竜泊ラインの入り口、津軽国定公園の中央に位置し、2000年第16回登録の「道の駅」である。 売店には、地元中泊産の海産物や加工品などのお土産品が多数あり、店内にある水槽には、春のヤリイカにはじまり、季節の魚等を見て楽しめる。レストランでは、県内No.1の水揚げであり中泊町小泊港で水揚げされたウスメバルを使い、新ご当地グルメと銘打った「中泊メバルの刺身と煮付け繕」通称中泊メバル膳や中泊産の完熟トマトを使用した「中泊トマト海鮮ラーメン」通称トマ鮮ラーメンをはじめ豊富なメニューが揃う。 「道の駅」を含む一帯は、折腰内オートキャンプ場、折腰内海水浴場を持つ総合交流施設で、夏場は大型バスの休憩場所として多くの人が訪れドライブ途中の休憩スポットとして人気の「道の駅」である。毎年7月に開催するビーチサッカーフェスタでは県内外の人で賑わう。11月上旬から4月中旬までは国道が冬期閉鎖となるため、「道の駅」も休業となる。 愛称にもなっている「ポントマリ」は、『ポン』はアイヌ語で“小さい”を意味し、『トマリ』は日本語の“泊”で、小さい泊＝小泊からきている。 「道の駅」のある中里町旧小泊地区は、北津軽郡の最北端。やや南北に長い形をしているが権現崎が日本海に飛び出しているため、東西約13 km、南北約16 kmとなっている。また平地がほとんどなく建物の多くは尾崎山のある半島か、その付け根に集中する。漁業が中心産業で、特にイカ漁は全体の70%を占める。 小泊から津軽半島先端の竜飛岬までの国道339号「竜泊ライン」の総延は約20km。日本海や十三湖・岩木山を望みつつ、信号皆無の絶景ロードが続く。風光明媚で豪快なワインディングロードで、途中の展望スポット「眺瞰台」(ちょうかんだい)では津軽半島を一望できるほか、天気が良ければ北海道がはっきり見える。展望台から眺める日本海を彩る夕陽は、国内でも有数の銘景で、ドライブには最適である。
青森-21	みさわ	斗南藩記念観光村	三沢市	県道170号	道の駅・みさわは、かつて牧場だった20haという広大な敷地の中に、ゴーカート場、バッテリーカー、パターゴルフ場、広場には遊具もあり、大人から子どもまで1日中楽しめる。 総合案内施設「くれ馬ぱ～く」内には道路情報や観光案内のほか、産直コーナーやレストランもあり、地元の新鮮野菜や三沢特産のニンニクやホッキガイの加工品など、お土産にもぴったりな品が豊富。 レストランで提供している大人気ご当地バーガー「エアフォースバーガー」は、米軍基地シェフのアドバイスを得て生まれたもの。地元特産やまざきポークを使用した焼き目のついたパテ、両面を焼いたバンズ、野菜とソースは食べるときに加えることが特徴である。 2021年にはご当地ソフト「ごぼう茶ソフトクリーム」を販売、焙煎したごぼう茶のナッツのような香ばしさと濃厚な味わいが大好評である。北側広場にある「三沢ホースパーク」では、乗馬や餌やり体験が楽しめ、気軽に馬と触れ合うことができる。 敷地内「先人記念館」では、日本初の民間洋式牧場を開いた幕末の志士・廣澤安任(ひろさわやすとう)の功績を紹介、当時の文献や農機具等を展示している。 明治維新の際に、代々の君主である徳川将軍家を最後まで見捨てなかった九代会津藩主松平容保(まつだいらかたもり)公が敗れ、旧藩23万石を没収されたが、1869年会津藩主松平容大(かたはる)をもって家名を立て、斗南藩を立藩した。廃藩置県により青森県が誕生、当時少参事として活躍していたのが廣澤安任である。 現在の三沢市谷地頭に日本初の民間洋式牧場「開牧社」を開設し、英国人2人を雇い入れ、英国のランサム社製農具を輸入、計画的かつ大規模な牧場経営を行った。福沢諭吉や大久保利通からも認められた廣澤は、国の富国強兵策に呼応し、良質の軍馬育成のため、養子を渡米させ、種馬を買い付けし馬の品種改良に努めた。晩年には東京に移住したが、移住先でも牛乳販売所を設置するなど、牧場の発展に尽くした。
青森-22	とわだ	とわだぴあ	十和田市	国道4号	道の駅・とわだは、2001年第17回登録の「道の駅」で、観光案内所、レストラン、無料休憩コーナー、匠工房、南部裂織(なんぶさきおり)保存会、テレトラック十和田を有し、国道4号沿いにある。 十和田市は、収穫量日本一のニンニク・ナガイモをはじめ、ゴボウ、ナガネギなどが特産品であり、農産物直売コーナーには、県内有数の農業生産高を誇る十和田の野菜が並ぶ。 「匠工房」は、南部裂織の伝承と普及の拠点として、2002年道の駅・とわだに隣接してスタートした。高い天井の梁の見える広々とした工房には、過去30年以上にわたって農家の納屋や古い民家などから集められた地機が55台、新しく作られた機10台とともに稼働中である。中には安政3年の墨書きが見える機や、そりを利用した機もある。教室で学ぶ会員数は約50人で体験も可能。 「農アイス」は、地元産のダイズ、おおすずから作った豆乳と、地元産米のまっしぐらを使った2種類のソフトクリームをベースに、ブルーベリーやコリンキー、ミント、黒ニンニクなどの旬の食材や地元食材を使ったソースを掛けて食べるアイスは大人気である。 「道の駅」のある十和田市は、青森県の南部地方、内陸部に位置し、十和田八幡平国立公園があり、十和田湖や奥入瀬渓流といった景勝地で知られる。青森県内では第4位の人口約6万人を有しており、上北地域の中心都市でもある。 ソウルフード「十和田バラ焼き」は、牛のバラ肉と大量のタマネギを、醤油ベースの甘辛いタレで味つけし、鉄板で焼く料理。豚バラや馬バラなどのバラ焼きもある。発祥は、今から約50年前の三沢米軍基地前の屋台と言われ、同じ文化圏の十和田市に広まったとされ、「道の駅」のレストランでも食べることができる。

県-番号	道の駅名	愛称	市町村	面する道路	内容
青森-23	つるた	鶴の里あるじゃ	鶴田町	国道339号	「道の駅」の愛称「あるじゃ」は、スペイン語のGrulla(鶴)とAla(羽・翼)を合わせた造語で、「鶴の翅」「鶴翔」という意味を持ち将来の繁栄を祈願する言葉でもあり、津軽弁で「ここにある」「見つけた」などの意味も持つ。 鶴田町はブドウ「スチューベン」の作付け生産量日本一で、2019年「つるたスチューベン」でG1(地理的表示保護制度)に登録された。「道の駅」では、つるたのスチューベンをはじめ、スチューベンぶどう大福、スチューベンぶどうジュース、スチューベンぶどうカレーなどブドウの加工品が豊富にある。他にも、地元産特産品や、地元産の小麦や大豆を使用した成人男性の両手のひらほどもある「びっくりパン」、「バケツ豆腐」も人気。 鶴田町の見どころの一つである日本一長い木造の橋「鶴の舞橋」は、「道の駅」から車で15分程行ったところにあり、1994年廻堰大溜池(通称津軽富士見湖)に架けられた全長300mもの三連太鼓橋である。四季折々の姿は観光客にも人気のスポット。 もう一つは、特別天然記念物の丹頂鶴が優雅に遊ぶ姿が観れる「丹頂鶴自然公園」は、つがいの丹頂鶴が飼育されている。江戸時代の頃、青森県鶴田町には数多くの鶴が飛来したといわれており、町名の由来にもなっている。1992年に「生きた丹頂鶴誘致」の声が高まり、1993年に中国黒龍江省より2羽を譲り受け、1997年にはロシア連邦アムール州よりつがいを譲り受け飼育された。2012年1月には当地で出生した鶴や多摩動物園から借り受けしている丹頂鶴オス5羽、メス5羽が飼育され、同年ヒナが誕生した。
青森-24	ふかうら	かそせいか焼き村	深浦町	国道101号	道の駅・ふかうらは、深浦町の中央部に位置する2002年第18回登録の「道の駅」で、海で獲れた新鮮な魚介や海産物が豊富な「道の駅」。いか焼きコーナーがあり、炭火で焼く焼きイカが楽しめる。また、白神山麓の肥沃な地が育てた野菜や山菜、これらを使った手作りの「飯ずし」や漬物などの加工品・お惣菜は絶品。中でもおすすめの「飯ずし」は、魚と野菜を米麹に漬けて、乳酸発酵させたもので低温発酵によって作られる。主に北海道から東北地方の気温が低い、沿岸部の地域に伝わる郷土料理である。ホッケやサケ、ハタハタ、ニシン、サンマ、ヤリイカなど近海でとれるさまざまな魚が用いられ、地元産のキャベツやネマガリダケなどと一緒に漬ける。低温で漬ける期間が短いため、匂いはおだやかで、コメの甘みと乳酸の酸っぱさのバランスが良く、食事としても、酒の肴としても人気である。 「道の駅」のある深浦町は、青森県の南西にあり、西は日本海、南は秋田県に接している。海岸線まで険しい山岳地帯が迫っており、青森県下でも5番目の大きさながら、森林・原野の割合が約90%の海と山の町である。青森県一のマグロの水揚げ量を誇り、日本海を回遊するクロマグロが大間へ向かう途中に、餌を求めて深浦町の沿岸部に寄り道したのが「深浦マグロ」となり、やや小ぶりながらほどよい脂ののり加減で味の良さに定評がある。 また、自然遺産・白神山地西部に位置するブナ林に囲まれた33の湖沼群「十二湖」は、絶景の観光スポット。1704年に発生した大地震による山崩れによってできたといわれており、崩山から眺めると12の湖沼が見えたことから十二湖と呼ばれるようになった。特に有名なのは鮮やかなコバルトブルーに輝く「青池」。水中には朽ちたブナの大木が横わたり、池底に倒れた木が見えるほど透明でありながら、インクを流したようなハッキリとした青の湖面が神秘的。同じように青色の湖水が美しい「沸壷の池」の湧水は「青森県の名水」にも選ばれている。
青森-25	おがわら湖	湖遊館	東北町	県道8号	道の駅・おがわら湖は、2003年第19回登録の「道の駅」。青森県で第一位の広さを持つ汽水湖、小川原湖の玄関口に位置し、センターハウスでは、小川原湖特産のヤマトシジミ、シラウオ、ワカサギなどの水産物や佃煮などの加工品、また、厳しい気候を活かして栽培される特産のナガイモやニンニク、ニンジン、トマト、ホウレンソウなどを扱う農産物直売所も人気。 地場食材を用いたメニューを提供するレストランの人気商品は、小川原湖産ヤマトシジミの旨み出汁のあっさりスープが自慢の「しじみラーメン」や甘塩っぱい「しじみソフト」。お土産品には、小川原湖で獲れるモクズガニを使った、冠婚葬祭など人が集まる時に振る舞う郷土料理でもある「ガニ汁」がおすすめ。一時、漁獲量が減ったが、漁協により回復しつつあり、小川原湖で育ったモクズガニをまるごとすりつぶし濾したスープには、身やカニミソなどが含まれ、あたためるとふわふわと固まり何とも言えない濃厚な風味と食感が堪能できる。 「道の駅」のある東北町は、青森県の東側、上北郡の中央部にある町で、人口は約1万6千人、名称の中に方角が二つ含まれる全国唯一の町である。 また、国内でも珍しい「モール温泉」がある。モール温泉とは、植物性の有機物を多く含んでいる温泉のことで、「モール」は泥炭地をあらわすドイツ語「Moor」からつくられた造語。植物が堆積した亜炭層を通って湧きあがる湯は、とろとろとした手触りや、飴色に近い湯色が特徴的だ。東北町にある「東北温泉」は、「道の駅」から車で15分ほどの、青い森鉄道乙供駅の近くにあり、モール温泉の中でも日本一“黒い”と分析評価された温泉で、源泉100%かけ流し。お湯は、アルカリ性の泉質で、肌の汚れや古い角質を落とす効果があり、天然保湿成分「メタケイ酸」も多く含んでいるため、乾燥した肌に潤いを与えすべすべとした美肌効果のある美人の湯とも言われている。

県-番号	道の駅名	愛称	市町村	面する道路	内容
青森-26	たいらだて	Oh!だいば	外ヶ浜町	国道280号	道の駅・たいらだては、津軽国定公園内にある、2005年第21回登録の「道の駅」。愛称の「Oh!だいば」は、すぐ近くにある江戸末期に弘前藩が構築した砲台の跡「平館台場跡」から。敷地内には、ログハウスやコテージが立ち並ぶおだいばオートビレッジ、地元名産品の直売所・センターハウス、キャンプ場などがあり、平舘海水浴場が隣接している。 産直施設では、「いわしの焼き干し」や地元で採れた野菜や山菜、ブルーベリーのほか、ホタテやコンブの加工品などがある。「いわしの焼き干し」とは、陸奥湾で獲れた、形の小さいイワシを炭火で焼き、十分に乾燥させた昔ながらの商品で、だしとして評判が高く、特に吸い物、そば、うどん等のだしには最適。津軽の郷土料理にも欠かせないものとなっている。 おだいばオートビレッジは、コテージが10棟、オートキャンプ場も20区画あり、キャンプや海水浴、津軽半島の観光の拠点として活用されている。 目の前の国道280号は「松前街道」と呼ばれ、津軽半島東部の青森市から龍飛崎に至る約120kmのルートである。藩政時代に北海道の松前藩主が参勤交代で通ったことから通称「松前街道」と呼ばれており、街道沿いには歴史資源や伝統芸能が今も随所に残されている。また、国道沿いにそびえる白亜の「平舘灯台」は、1899年に明かりが灯された西洋式灯台で、高さ23m。かつて津軽海峡を航行していた青函連絡船にとって重要な役割を担い、船舶を100年以上見守ってきた。間近で見ることも可能、イベント時には一般公開することもあり、写真スポットとしても人気。
青森-27	ろくのへ	メイプル ふれあいセンター	六戸町	国道45号	道の駅・ろくのへは2007年第24回登録の「道の駅」。愛称の「メイプルふれあいセンター」は、町の木がカエデ(メイプル)であることから。六戸町特産の野菜や地鶏「青森シャモロック」、道の駅・ろくのへオリジナルの加工品などを取り扱っている。中でも人気は、週末に販売する「串もち」。炭焼きで小麦粉や餅粉を練って焼いたものに、「ねぎ味噌」や「じゅね(エゴマ)味噌」を塗った串もちはファンが多い。 六戸町は、人口約1万1千人の、八戸市、三沢市、十和田市のちょうど中間あたりにある町。青森県の太平洋側に位置し、県内では比較的雪も少なく、平坦な土地も多いため、農業が盛んである。なかでも「日本一の大玉にんにくの町」としても知られている。また、行者ニンニクとニラを掛け合わせた野菜「行者菜」は、県内で六戸町だけが生産している。「道の駅」でも、地元野菜を使った「野菜ドーナツ」、ニンニクを使った「かあちゃんの万能みそたれ」は話題の商品。 ブランド地鶏「青森シャモロック」の飼育に最初に取り組んだ町でもある。父鶏は軍鶏を改良した「横斑シャモ」、母鶏はプリマスロックを改良した「速羽性横斑プリマスロック」を交配させて1990年に生まれた。全て平飼いで、一般のブロイラーの2倍の期間をかけてじっくりと育てるため、グルタミン酸とイノシン酸の含有量が多く、市場では名古屋コーチンや比内地鶏と同等の評価がある。青森シャモロックカレーやくんせいなどの道の駅オリジナル加工品はお土産に最適。そのシャモロックを特別飼育した「ザ・プレミアム#6(ナンバーシックス)」は六戸町でのみ生産され、生産羽数の少なさから希少価値の高い逸品となっている。
青森-28	津軽白神		西目屋村	県道28号	2017年第48回登録の、世界遺産・白神山地の入り口に建つ「道の駅」。既存拠点をリニューアルし、2019年4月に完全オープンした。ビーチは「ブナ」のこと。弘前市から車で30分、岩木山の南麓に位置し、豊かな自然に恵まれ「水源の里」としても知られている。 農産物直売所では、白神の山々で採れる季節の山菜・キノコ類が自慢。春から夏にかけては、タケノコ・ゼンマイ・コゴミ、秋にはナラタケ・マイタケ・ナメコなどが所狭しと並ぶ。冬季限定の「目屋豆腐」は人気商品。広々とした約40坪のフードコートでは、駅自慢のご当地グルメ「津軽ダムカレー」、人気No1の「めぇ～や味噌ラーメン」、西目屋産そば粉を使った十割そばなどが人気。白神ジビエ・クマ肉料理も数量限定にて提供。アウトドアのモンベルコーナーもあり、トレッキングアイテムを中心にオリジナル商品も。津軽の伝統技法「こぎん刺し」から着想を得た模様がデザインされたオリジナルグッズを限定販売している。食品加工センターでは白神そば打ち体験、伝統の「目屋豆腐」づくり体験なども可能。他にも西目屋村で採取した「白神生はちみつ」をかけた手作りジェラートと、青森県産リンゴを使用した非加熱のできたて樽生ハードサイダー(リンゴの発泡酒)を、その場で缶に詰めてテイクアウトできるコーナーや、コーヒー豆の焙煎工場と焙煎体験と白神山地の天然水で淹れたコーヒーが楽しめるコーナーもありもりだくさん。 また、水陸両用バスで津軽ダムを楽しむ「西目屋ダムレイクツアー」の発着点にもなっており、バスがダム湖に入っていく迫力が観光客にも人気のツアーである。津軽ダムは、一級河川・岩木川本流上流部に建設された、国土交通省直轄ダムで、高さ97.2mの重力式コンクリートダム。岩木川総合開発事業の中心事業として岩木川の治水、津軽平野への灌漑、流域都市への水道供給および水力発電を目的とした特定多目的ダムである。1960年に完成した目屋ダムのダム再開発事業として、目屋ダム直下流60m地点に建設され、2017年にダムがオープン、完成に伴い目屋ダムは水没、現在に至っている。